

駄菓子屋模擬店運営を通じた児童文化的社会貢献と保育学生の学び

八尋 茂樹*

新見公立短期大学幼児教育学科

(2014年11月19日受理)

本稿では、新見公立大学・短期大学構内で4年連続でおこなった駄菓子屋模擬店が地域住民に対し福祉的どのような貢献ができたか、また、この活動に参加した保育学生たちがどのような学びを得たかを考察した。その結果、親子や家族内での良好なコミュニケーションの一助になりえたことや、近年の機械的な買い物では学べない「人と人との濃い関わりから生まれるぬくもり」などを感じる大切な機会を提供できたことがわかった。また、保育学生たちが、ひとりひとりとの結びつきを大切にする対人援助職の基礎について学ぶ機会を得ていることもわかった。今後も多くの人たちが大学へ足を運ぶ機会としながら、地域社会に貢献できる企画のひとつへと成長できるよう継続していきたい。

(キーワード) 大学, 駄菓子屋模擬店, 児童文化, 社会貢献, 保育学生

I. 研究目的

筆者は、大学祭等の行事を利用しながら大学構内で駄菓子屋模擬店を運営し、来店する児童(幼児を含む)やその保護者、市民の購買行動を観察することによって、本学周辺の地域の児童や保護者の特性についての考察を2007年より行ってきた(八尋他, 2008)。また、新見公立大学・短期大学では2011年度から2014年度まで4回にわたって駄菓子屋模擬店を開催した。本稿では、大学構内でおこなった駄菓子屋模擬店が地域住民に対し、福祉的どのような貢献ができたか、この4年間で蓄積されたデータを再構成しながら考察する(八尋, 2011, 2012, 2013)。

II. 調査の内容

1. 調査方法

2011年度から2014年度まで、毎年5月に2日間に渡って開催される鳴滝祭(大学祭)において駄菓子屋模擬店を展開した。いずれの年度も市民ボランティア3名ないし4名及び筆者のゼミに所属する学生5名の協力を得て、2号館(学食)の後方、3分の1のスペースで開いた。

調査方法は、ビデオカメラを模擬店入口に1台、模擬店奥の左右に1台ずつ、計3台を設置し、来客者の行動を中心に記録した。また、模擬店員は、児童や保護者、市民とのやりとり(会話)についての気づきがあった場合、メモをとるようにした。さらに、模擬店の出口で筆者は、

毎年80名から120名前後に模擬店に対する感想の聞きとり調査をおこなった。

模擬店入口には「この模擬店は研究のためビデオ撮影しています。ご協力ください。ご質問等ございましたら係の者に遠慮なくお申し付けください」と紙を掲示し、また、聞き取り調査をおこなった際には、データとして研究のみで使用する許可をとった。

2. 模擬店内容

模擬店で取り扱った商品は、大きく「駄菓子」、「駄玩具」、「くじ」の3つに分類され、具体的な商品については表1の通りである。商品の価格はスーパー等での実売価

表1 駄菓子屋模擬店で販売した商品

駄菓子	うまい棒, きなこ飴, きなこ棒, フルーツ糸引き飴, モロッコヨーグル, 甘いか太郎, ヤッターめん, カレー味せんべい, フラワートップ菓子, ココアシガレット, 花串カステラ
駄玩具	ようかいけむり, 紙せつけん, おめん, 吹き戻し笛, スライム, おはじき, ソフトグライダー, スーパーボール, ファッションリング, お姫様セット(ティアラ, カチューシャ), ミニカー
くじ	スーパーボール当て, ONE PIECE(ワンピース)文具当て, かわいい消しゴム当て, ディズニー文具当て

*連絡先: 八尋茂樹 新見公立短期大学幼児教育学科 718-8585 新見市西方1263-2

格を調査し、その価格よりも3分の2から半分に設定し、来店者、特に児童が購入しやすいように配慮した。

また、昔ながらの駄菓子屋の雰囲気を再現するために、運営にあたったゼミ学生全員が事前に岡山県内の駄菓子屋を訪れて、その配置方法について調べ、また、駄菓子屋店主にインタビューすることで、駄菓子屋店主としての姿勢や日常の子どもたちの姿について学んで本番に備えた。そこでの学びを活かし、模擬店では圧縮陳列(狭い空間に多くの商品を配置する陳列方法)の再現や、薄暗い「秘密の場所」のような印象を作るために窓は全てブラインドを閉めるなどの工夫に努めた。また、通常の駄菓子屋ではおこなわれていないが、模擬店内では昭和30年代から40年代の懐かしさが感じられる曲を繰り返し流したり、駄菓子を入れる容器も竹かごを利用したり、看板や値段表示等は全て手書きとするなど、少しでも「昔」の印象が漂うように演出した。

また、毎年、実際の駄菓子屋との交流を重ねたことにより、駄菓子屋店主から安く商品を仕入れるルートの教示を得たり、使わなくなったグッズ(模擬店での装飾に使用)の提供を受け、経費を大幅に削減して運営できるようにした。

2012年度からは、筆者のゼミ所属学生運営による研究ブログを立ち上げ、そこでの模擬店の宣伝活動をおこなった。

II. 調査結果

1. 駄菓子屋模擬店の出店状況

来客者は毎年2日間を表2のとおりであった。

表2 来客数の推移

年度	総数	児童	大人
2014	708	223	485
2013	614	181	433
2012	629	173	456
2011	298	83	215

2. 模擬店での市民の様子

模擬店で用意した駄菓子は、実際に駄菓子屋で売られている商品を中心に、特に現在スーパーでは購入できないもの、また、昔から残っているものを選定した。そのため、大人からは「懐かしい」、「子どもの頃によく食べた」、「家にいる息子に買っていく」等の声が聞かれた。また、児童は見たことのない「新しい菓子」に感じられるのか、店員や同伴の保護者に「これは何?」、「おいしいの?」等と質問する光景が多々見られた。さらには、保護

者の方から児童に「これおいしいから食べてみたら?」と、自らの児童期の経験に立ち戻って、駄菓子を共通の話題とした親子の接点を設けていた。駄菓子の当たりくじを持って再来店する児童の生き生きとした姿に、店内では店員のみならず、来客した市民全体が非常に活気づいた。

駄玩具に関しても、ゲーム世代の児童が見たことのないレトロな玩具から、時代を超えて愛されるお面まで幅広く好評を博した。また、例えば、ようかいけむりなど昭和に流行したおもちゃは、保護者(父母、または祖父母)や店員が説明したり実践することで児童はアナログな玩具の動きに目を輝かせて見入り、積極的に購入されていた。

3. 模擬店に対する意見

来店した市民からは、以下のような意見を聞くことができた。

- (1) 「地域のお祭りでも出店してほしい」、「大学祭以外でもやってほしい」、「来年もあるのか?」、「市の協力を得て駄菓子屋を出してはどうか」という要望や提案
- (2) (初日に午前中で売り切れてしまったので)「明日もやるか」という確認、「今年もやると聞いていたので、楽しみにしてきた」、「昨年、近所で駄菓子模擬店のことが話題になった」、「(開店1時間半前から待っていた親子から)「子どもが早起きして、行くのを楽しみにしていた」、「残念なことに新見市には子どもから大人までワクワクする場所(機会)があまりないので、こういう場を設けてもらってうれしい」という感想
- (3) 「若い人にこのような体験をさせるのは良い」という意見
- (4) 「昔の駄菓子屋、子どもの頃の駄菓子」についての体験談
- (5) 「学生が日頃からよく挨拶してくれるのがうれしい」という大学に対する印象

また、模擬店を運営した保育学生、来店した保育学生からは以下のような意見、感想が出た。

- (1) 「幼い頃に通っていた駄菓子屋が懐かしくなった」、「忘れていた遊び心を思い出した」という懐古的な感想
- (2) 「来店する人たちがみんな笑顔だったのでうれしかった」、「お客さんから『ありがとう』と言ってもらって、運営に携わって良かったと思った」、「子どもからお年寄りまで幅広い年齢層のお客さんに来ていただき、意義のある場を提供できていると実感できた」、「市民の方たちと親しく話をすることができてとても良かった」という来客者との接点からの感想
- (3) 「今の子どもたちが何をして遊ぶのか、何が好きなかを5人で何日もかけて考えて集めた景品だったが、まだまだ勉強不足、調査不足だった。子どもたちのこと

を知っているようで知らないということが、子どもたちと直に触れ合うことによってわかった」、「駄菓子を買っていただく、くじを引いていただくという行為が、売る側の目線ではなく、買う側の目線でなければ、目の前の相手を十分に満足させることができない。これは、保育や教育で必要な考え方だと思った」、「駄菓子を買ったり、くじを引いたりして喜んでいる姿にうれしく思う一方で、何度も何度も同じ子がくじを引いて、後ろに列ができてしまうことがあると、公平性も考えなくては、本当に多くの人を喜ばせていることにならないと感じた」、「販売する係でない時に休んでしまっていたが、くじを引く順番を誘導するなど、運営を上手におこなうためには、ほーっとする時間を作ってはいけないことを知った」「模擬店運営は楽しいが、実際にはお金を扱っているのだから、楽しいだけでは失礼なことも発生し、緊張感を持って接することが必要だと知った」、「自分が保育者になったり、子どもが生まれたら、駄菓子屋のような場所に必ず連れていきたいと思った」、「ゲームなどとは違った、安っぽいけど楽しめる玩具に、いまどきの子どもたちが夢中になっている姿をみて、大変良いことだと思った」、「母親を中心として、家族が子どもたちに買い物を通してしつけなどを行っている光景を見ることができ、とても勉強になった」などの保育学生の視点からの感想

(4) 「この駄菓子屋模擬店を毎年恒例行事にすることによって、市民の方々が笑顔になれる場を1回でも提供し続けられれば良いと思う」、「今後は内容をさらに充実させ、新見市を中心に、各地でも話題になるほどの模擬店にしていけたら良いと思う」といった展望的な意見

III. 考察と課題

松村(2012)は、現在の日本の進学状況は、18歳人口の半数近くが大学や短大に進学する傾向にあるため、大学の存在自体が地域への貢献に強く結びついていると指摘する。つまり、大学の教職員と学生が真に地域に溶け込むことで市民から愛され、大学の必要性が地域全体に浸透することは、町に存在する大学としての意義や価値を地元だけでなく全国に向けて高め、より多くの人々の関心を集めることにつながると考える。

筆者が展開してきた駄菓子屋模擬店は、継続することによって定着が見られてきた。では、社会への貢献の視点に立った場合、地域社会と大学に対してどの程度の貢献ができ、この企画に携わった保育学生たちはどのような学びを得たのであろうか。

1. 地域住民への児童文化的社会貢献

前節の事例で挙げたように、駄菓子や駄玩具は世代を

超えた共通の話題となり、世代間の接点を即座に作り出すことが可能である。近年、子どもたちが触れるゲームは常に時代の最先端を行き、児童の現場で主流となる文化の土俵では、父母や祖父母は子どもたちと上手に接点を持ってないでいる。子どもが欲しがめるゲームを与えたまま放置する状態が多くのお家庭で見受けられる。しかし、駄菓子や駄玩具は、ほとんど保護者たちの時代から変化していない。そのため、保護者自身が自らの幼少期を懐かしみ、童心に返ることができる一方で、子どもたちが非常に興味を示しながらも初めてみる古くからの駄菓子や駄玩具がたくさん存在するため、保護者から子どもへの児童文化の伝承的な活動の場にもなっている。また、大人も子どもも家庭に戻ってからも駄菓子を前にして模擬店の余韻に浸り、親子や家族内での良好なコミュニケーションの一助になりえている。

近年、駄菓子屋自体が全国的に減少しており、子どもたちが自らのお金を握りしめて駄菓子や駄玩具に触れたり、駄菓子屋で初めての買い物の体験をしたり、あるいは社会のルールを学ぶ第一歩となったり、学校では学べないことを実践的に身につけたりする機会が減っている。そのような現状を見ると、スーパーマーケットのバーコードによる便利で機械的な買い物では学べない「人と人との濃い関わりから生まれるぬくもり」などの大切な事柄を、児童を中心とした駄菓子屋文化の再現の中で、例え疑似的であっても機会を提供できており、今後も継続することに地域貢献的な意義があると考えられる。

2. 保育学生が得た学び

模擬店運営に携わった運営学生たちは前節のような感想を抱いたが、その後のゼミナールおよび卒業研究において、「保育の現場でも、保育する側の目線だけに縛られてしまうことなく、保育を依頼する側の目線に立って考えられる保育者像が大切だとあらためて思った」と、保育学生としての自分たちが、ひとりひとりとの結びつきを大切にすると対人援助職の基礎について学ぶヒントがこの模擬店運営にもあり、「この経験をもとに、今後、保育現場での実践を通して深めていきたい」という課題に到達した。このように、ただ「子どもが好きだから」という理由で保育者を目指すのではなく、プロが必要とされる顧客満足を高めるための勉強をすることは、保育や教育について教室で学び、現場で実習をおこなうことでより良い保育者像を目指している保育学生に対して、深みのある考察をする機会を与えるのではないかと考える。

3. 大学の存在意義を高めるための試み

聞きとり調査の中で市民からは、「残念なことに新見市には子どもから大人までワクワクする場所があまりない」という意見が多く聞かれた。しかし、これは静かで平和

な街を維持するための重要な要素でもあり、この肯定的要素を活かしながら、この駄菓子屋模擬店が健全な歓楽を市民に提供する一助になるとすれば、今後も企画運営する意義があろう。

また、大学を身近な存在として捉えてもらう良い機会にもなると考えられる。とかく教育機関や福祉施設などは閉鎖的になりがちであり、地域の中にありながら「近くて遠い」存在となることが多いことは良く知られている。新見公立大学・短期大学も、有望な人材の輩出をする教育の推進に向けてこつこつと努力することは言うまでもないが、大学は市民の支えあってこそ存在できると自覚し、市民が大学や学生及び教員に対して「近い存在」ととらえ、好意的に受け入れられる理解を得る必要がある。そのためにも、多くの人たちが大学へ足を運び、生の大学を見ていただく機会となる企画を積極的に立てていくことは有益だと考える。

4. 課題と展望

この駄菓子屋模擬店を4年続けて実施したことにより、年々定着してきている。市民の方々からは総じて好意的に捉えていただいております。現時点では「辞めるべき」という否定的意見は受けていないので、今後も運営資金を上手に捻出しながら継続していきたい。ただし、本学の属する地区から離れた地区からの利用者は必ずしも多くはない。今後は新見市全体の市民に貢献できるような工夫がなされた企画へと改善していく必要がある。

また、2014年9月13日には、岩手県宮古市にて駄菓子屋模擬店を開催した。これは被災地の子どもたちに駄菓子屋を体験させてあげたいという宮古市民の申し出に応じたものである。今後は、日本全国も対象として、新見市の大学による社会貢献活動のひとつへと成長していきよう努力していきたい。

文献

- 松村 豊大：大学の地域貢献についての一考察-地域に受け入れられる地域貢献活動とは。徳島文理大学研究紀要, 83, 91-98, 2012.
- 八尋 茂樹, 国広 勝代, 石川 正一, 他：駄菓子屋模擬店にみる萩市の子どもたちの特性に関する考察。山口福祉文化大学研究紀要, 1(1), 53-59, 2008
- 八尋 茂樹：駄菓子屋模擬店運営による地域貢献への試み。新見公立大学紀要, 32, 195-197, 2011.
- 八尋 茂樹：駄菓子屋模擬店運営による地域貢献への試み2。新見公立大学紀要, 33, 165-167, 2012.
- 八尋 茂樹：駄菓子屋模擬店運営による地域貢献への試み3。新見公立大学紀要, 34, 125-128, 2013.